

Title	ゲデス・プロジェクトの経緯
Sub Title	
Author	
Publisher	三田哲學會
Publication year	2005
Jtitle	哲學 No.114 (2005. 3) ,p.193- 197
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000114-0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゲデス・プロジェクトの経緯

慶應義塾大学大学院社会学研究科の藤田研究会では、都市と公共性の問題を取り上げるかたわらで、都市社会学の学問的構造に焦点を当て研究を進めてきた。そのプロジェクトの一環として、都市社会学の学問的系譜を探ってきた。そのひとつの帰結が、藤田弘夫「都市社会学の多系的発展—都市社会学100年史—」（『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第55号2002年）である。その後、研究会では、シカゴ学派の原像を探るために『アメリカ社会学雑誌』の1895年の創刊号から19世紀末までの号に、当時の学問的情况を知ることのできる論文を取り上げ、その翻訳を『社会学研究科紀要』紙上に発表してきた。それは、次の4本の論文となっている。

①A. W. Small, The Era of Sociology, *The American Journal of Sociology*, Vol. 1, Number 1, 1895. (福田光弘訳「社会学の時代」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第55号2003年)。②Charles Zueblin, The World's First Sociological Laboratory, *The American Journal of Sociology*, Vol. IV, Number 5, 1899. (高岡文章訳「世界で最初の社会学的実験室」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第55号2003年)。③A. W. Small, The Civic Federation of Chicago: A Study in Social Dynamics, *The American Journal of Sociology*, Vol. 1, Number 1, 1895. (三上真理子訳「シカゴ市民連盟：社会的ダイナミックスの研究」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第56号2003年)。④C. R. Henderson, The Place and Functions of Voluntary Associations, *American Journal of Sociology*, Vol. I, No. 1, 1895. (新井智浩訳「ボランティア・アソシエーションの機能と位置づけ」『人間と社会の探求』慶應義塾大学大学院社会学研究

科紀要 第 58 号 2005 年刊行予定)。

シカゴ学派の研究と平行して進めたのが、イギリスの都市社会学の系譜を遡ることだった。そのなかで、パトリック・ゲデスに着目した。ゲデスは高名な L. マンフォードをはじめアメリカの都市研究者に大きな影響を与えている。ゲデスの著作では *Cities in Evolution*, Ernest (Benn Limited, 1915) が、西村一郎教授たちの手で『進化する都市』の名で翻訳され、鹿島出版会から 1982 年に刊行されている。この書はゲデスの都市社会学を代表するものとなっている。本書で、かれは都市社会学を、“Civic Sociology” と読んでいる。しかし P. ゲデスはそれ以前から、都市研究に Sociology の用語を用いている。ゲデスはブランフォードたちとともに、ロンドンで社会学会 (Sociological Society) を組織するとともに、1904 年の会議で “Civics: As Applied Sociology” を、さらに 1905 年の会議で “Civics: As Concrete and Applied Sociology, Part II” と題する発表を行っている。ここに都市社会学の源流を探ろうとした。どういふわけか、現在、ゲデスの名は都市社会学者のあいだでほとんど知られていない。そのことも含めて、都市社会学の原像を研究対象とした。

そこで当時の社会学会の様子を知ろうと、イギリスでの調査の合間に、ケンブリッジ大学の中央図書館で、手がかりとなる文献を探し回った。しかし学会の記録が残っているかどうかわからないばかりか、もしそれが残っているとすると、それがどのようなかたちであるのかが想定できず、思うようにははかどらなかった。その後、ゲデスについての研究書を調べている時に、Helen Meller (ed.), 1979, *The Ideal City*, Leicester University Press のなかに、ゲデスの報告が掲載されているのを発見した。そこには学会当日の出席者の発言から、新聞のコメントまでが収録されているのを発見することができ、関心は一気に高まった。本書を通じて、1904 年の社会学会の記録が準備段階の資料を含めて、Bryce, James (ed.), *Sociological Papers*, 1905, *Sociological Papers*, 1906 にまとめら

れ、Macmillan & Co., Ltd. から発行されていることを知った。この書によって、ゲデスの報告はもちろんのこと、社会学会での F. ゴルトンや E. デュルケムなど多くの著名な研究者の報告やコメントに接することができた。

現在、P. ゲデスの資料の大部分がグラスゴーにあるストラスクライド大学 (Strathclyde University) の古文書館に所蔵されている。また、エディンバラ大学の建築学部には 1985 年、パトリック・ゲデス計画学センターがジョンソン・マーシャル (Percy Johnson-Marshall) 教授によって設立されている。

翻訳の検討会は 2002 年より開始された。2003 年の秋には、すべてのテキストも揃い作業が本格化した。翻訳は 2004 年の末まで続けられた。ゲデスの晦渋な文章には苦しめられた。検討会は毎回のよう、開始後すぐ訳文をめぐって膠着した。ゲデスの『進化する都市』に西村一朗教授の訳で接した読者は、訳文の難しさを感じただろう。しかしその原因は何よりも、ゲデスの晦渋な文章にある。わたしたちの訳はけっして西村一朗教授のもの以上ではない。しかし英語に専門的知識を持たない非力な研究者たちの精一杯の訳である。

ゲデスの報告の文章のうちのかなりの部分が、*Sociological Papers* では、活字のポイントを落して印刷されている。Meller の *The Ideal City*, 版では、この点が無視されている。このことが何を意味しているのかは、理解できなかった。ポイントの落ちている部分は報告後、発表原稿を活字にする際に、討論部分とともに付け加えられた可能性が強い。

翻訳の検討会は時間が過ぎるのを忘れながら、作業が続けられた。議論は延々と続き、時には終電車を気にしながらの作業であった。一度決まった訳語も何度か変更を余儀なくされ、多くの時間を費やした。その間、門田健一君には翻訳の専門家として、研究会に出席してもらった。三上真理子、皆吉淳平、石井清輝の諸君には検討会から訳文の最終的チェックま

で、刊行に向けて多くの労を費やしてもらった。また北中淳子君には途中から訳出を決定したゴルトンの翻訳に加わってもらった。とくに皆吉淳平君には年末年始の時期と刊行に向けての最後の調整で集中的に作業にあたってもらった。

ゲデス論文翻訳プロジェクト担当者および参加者一覧

北中淳子（慶應義塾大学文学部助手）
高岡文章（福岡女学院大学専任講師）
三上真理子（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）
新井智浩（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）
皆吉淳平（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）
石井清輝（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）
篠大輔（慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程）
青島耕平（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
西川恭子（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
古谷真一朗（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
五條堀陽子（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
山田賢司（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
仁井田典子（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
大江友樹（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）
（以上、翻訳担当者）

門田健一（早稲田大学非常勤講師）
阿拉騰烏拉（慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生）
（以上、検討会参加者）

ゲデス論文翻訳検討・担当者一覧

分担範囲		担当者		
区分	オリジナル頁数 /H. メラー版頁数	翻訳担当者	コメント担当者	
第1論文	本文	pp. 103-118/pp. 75-90	皆吉 淳平	五條堀陽子
	討論①	pp. 119-125/pp. 91-99	篠 大輔	皆吉 淳平
	討論②	pp. 125-129/pp. 99-103	西川 恭子	篠 大輔
	書評とリプライ	pp. 130-138/pp. 104-113	新井 智浩	仁井田典子
	プレスコメント	pp. 139-144/pp. 114-122	五條堀陽子	新井 智浩
第2論文	本文①: A~E	pp. 57-70/pp. 123-136	石井 清輝	三上真理子
	本文②: F~J	pp. 70-85/pp. 136-150	古谷真一朗	山田 賢司
	本文③: K~N	pp. 85-97/pp. 150-162	三上真理子	古谷真一朗
	本文④: O~R	pp. 97-111/pp. 162-174	高岡 文章	石井 清輝
	討論とリプライ	pp. 112-119/pp. 175-183	青島 耕平	大江 友樹
	序文とまえがき*	pp. ix-xviii	山田 賢司	仁井田典子
	Galton 論文#	pp. 45-50	北中淳子・皆吉淳平	

※

#